
伝文

日本口承文芸学会 会報

第52号 2013年2月 発行

日本口承文芸学会

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 間宮史子研究室

TEL 03-3326-5144 (内線207) / FAX 03-3326-1319

E-mail koshobungei@mail.goo.ne.jp

ニコライ・ネフスキーの「未完成」

荻原 眞子

ロシア帝政末期、革命の前夜に日本研究を「三分割」したロシア人の少壮学者がいた。それは後に「日本学の父」と呼ばれたN. コンラド(1891-1970)、仏教哲学者O. ローゼンベルグ(1893-1919)、そして「神道研究」を志したニコライ・ネフスキー(1892-1937)である。コンラドとローゼンベルグが日本留学の後本国で日本研究に貢献、礎を築いたのに対して、ネフスキーにはその機会は与えられなかった。昨年10月、ペテルブルグの「東洋文書館」で開催された「生誕120年記念N. A. ネフスキー会議」では、この(日本では余り省みられることのなかった)日本学の先達に多くの報告が捧げられた。

ニコライ・ネフスキーはペテルブルグ大学で日本学、東洋学を学んだ後、1915年に留学生として来日、以降1929年に帰国するまで黎明期の民俗学、アイヌ学、琉球学など日本文化研究の錚々たる碩学と知遇を得て交流を深め、日本文化の真髄にふれるような多くの成果を遺した。その研究領域は日本の民族・民俗学、アイヌ学、琉球学、台湾の曹族研究および西夏学(ソ連において大成)にまたがっている。

民俗学についていえば、ネフスキーは柳田国男、折口信夫、中山太郎などと交流し、また、佐々木喜善などとも知り合って遠野をはじめ東北地方で民俗調査、オシラサマ研究に傾倒している。その成果は雑誌『土俗と伝説』、『民族』などに発表された。また、1919年から小樽高商に職を得て、その間にメノユカラなどを聞き取り、金田一京助にアイヌ語を教授されてその露訳に努めた。1922年に大阪外語大学のロシア語教師となっても鍋沢ワカルパの娘ユキにアイヌ語を教わりながらユカラの研究を続けた。(『アイヌ・フォークロア』1991年、原著はL. グロムコーフスカヤ編 1972年。) また、1923、1926、1928年にネフスキーは宮古へ渡って民俗調査、方言調査を行ない、有名な「月と不死」、「アヤゴの研究」(『宮古のフォークロア』1998、原著はL. グロムコーフスカヤ編 1978年)、「宮古島子供遊戯資料」など数多くの成果をものにしていく。ネフスキーには音声学の類稀なる天与の才があった。聞き取った言葉を独自の音声表記で記録し、それを読み上げると、目前の話し手はその正確さに驚いたという。学会では「宮古方言辞典」の膨大な草稿についてA. マイエヴィッチ教授がその意義と重要性を強

調された。

ネフスキーは1930年代の粛清により洋々たる後半生を絶たれた。1920年代の日本民俗学界に深遠にして鳥瞰的な比較研究を意図した先達がいたことを想い、投げかけられた課題を真摯に受け止めなおす必要を痛感する。基調講演で加藤九祚先生はシューベルトの「未完成交響曲」になぞらえて、ニコライ・ネフスキーを偉大なる「未完成」と評された。(千葉県)

日本口承文芸学会 第63回研究例会 報告1

記述を輝かせるスタイル

中村 とも子

本例会における野村典彦の報告のタイトルは「民話(はなし)という記述(かきかた)」。1958年に創刊された雑誌『民話』を基幹にすえて、「聞き手」がどのように記述＝「書いて」いるかを具体的に検証し、そこから浮かび上がってくるものをとらえようとした。

宮本常一は『民話』3号で、「私の祖父一年寄りたち第一回」を書きだした。たくさんの老人に会って話を聞き続けてきた中で、「一ばん印象にのこっているのは祖父」だということを受けて、野村は、自分の祖父母や親など身内から話を聞きとり、文字化していくことが話を記述することの原点であったと指摘した。平凡な人の一生は、その人を知っていた身内が絶えると忘れ去られる。しかし、身内が聞くことによって、語り手の人生のありようが詳細に記述され、文字として残る。語り手の死に方までたどることも身内だからこそできることで、最後の一瞬を記述することによって、平凡な人の人生が凝縮されて映し出される。昔話をする年寄りの姿に、文字を知らない人たちが伝える世界の豊かさを、どうやって聞きだしているかを探ることができるという。今では存在も名も残されていない年寄りたちのその人生のしめくりも大事に述べる、そのあり方が、「語り」に沿う叙述のスタイルを形成しているという。

野村が大きく取り上げたもうひとりの聞き手は大庭良美。大庭は故郷の岩見日原村(現津和野町の一部に合併)町史編纂に携わった人だが、彼の民俗リサーチは語り手の個人名を記録し、聞いた「場」を尊重する意識が際立っているという。あの時、あの人からこんなふう聞いたという周辺を大事に記述している。語られたことが記述されることには、さまざまな様態がある。町史のように書き方が決まっていて、収斂していくきは「語る」ものとは別のものになる可能性もある。しかし、はじめは、「語られた」音を、紙に落としたもの、記述があったはずである。「聞き手」が「記述」するときに、その日の「場」、聞き手だけが再現できる周辺の記録を加味すること、それが記述そのものを輝かせるのだと、野村はいう。

現在はさまざまな分野に民話が素材として提供されている。再話や台本などの過程を経たものは「聞いたまま」ではないということが現実だ。その現実、口承文芸を志す者はどう向き合っていくのか。野村の発表を受けて、会場は意見交換に沸いた。(東京都)

「民話」の時代

佐藤 優

昨年11月18日(日)白百合女子大学において開催された日本口承文芸学会第63回例会は、「民話の時代と〈口承〉—1950年代の民話運動と民俗学—」というテーマで岩本通弥氏が「民俗学と〈口承〉」、野村典彦氏が「聞書」の視点からそれぞれ報告が予定されていた。しかしながら、当日岩本氏が体調不良ということで、重信幸彦氏が代役をお勤めになった。

ところで、例会では、「日本の民俗学において「口承」という問いが周縁化されていった一つの契機を、1950年代の民話運動と民俗学との関連性のなかにさぐる」ことを主眼とした報告がおこなわれた。今回は、重信氏の報告「「民話」の時代を問うために：覚書」の議論を通して見えてきた「民話」の時代について少し考えてみたい。

重信氏は、1950年代における関敬吾の民俗学内部での処遇と昔話研究における研究視角を分析し、彼が提示した「昔話生態学」や「昔話生物学」という視点は、という考え方の先取りと読めることを指摘した。さらに、「民話の会」とも関わりのある北九州の炭鉱労働者サークルで編まれた『サークル村』における記録の実践が、文化を個人の創造物ではなく「無署名の思想」から生まれるものである問題意識に貫かれていたと述べた。そして、こうした意識が「集団の創造」である「民話」を問うことと通底しあい、自分たちのことばを奪還／獲得する意識を共有しながら「聞き書き」や「口承」の叙述を具体化していった時代であったことを見通された。

重信氏が省察した通り、関は『日本民俗学大系』第10巻(1959)所収の「民話」において「瓜子姫」を語る語り手の写真を分析し、「民族がいかなる身ぶり・動作・ゼスチャーを伝承することは、民俗学の重要な課題」であることを指摘している。『著作集』において、写真を分析した箇所は削除されているが、近年の昔話研究における身ぶりに関する議論の先駆けとして位置づけられ、口承文芸だけでなく芸能研究も関は視野に入れていたと考えられる。

また、『サークル村』の中心的メンバーの一人上野英信は、後に『追われゆく坑夫たち』(1960)や『地の底の笑い話』(1967)を出版した。その意義について重信氏は「労働現場の「話」を素材にした近代炭坑の民俗誌と言いうる作品」と評しており、こうした方法や問題意識は、金子毅の仕事(『八幡製鉄所・職工たちの社会誌』(2003))へつながるものであると位置づけることができるであろう。

1950年代の民話の時代を問い直すことで口承文芸学が民俗学内で「閉ざされた研究領域」ではなく、むしろ現在の民俗研究の方法論を内側から問い直す契機があることを重信氏は例会開催趣旨とともに明快に論じておられた。そして、「口承」という視点は、多様な研究視角を含有していることも改めて認識でき、この研究に携わる者として勇気をいただけた一日であった。(埼玉県)

商売の餌食にされているグリム童話

小澤 俊夫

2012年はグリム童話集刊行200年の年だった。200年前のドイツでは、メルヒェンを作品としてまとめて発表した作家はムゼーウスをはじめ、ベヒシュタイン、アルバート・ルートヴィヒ・グリムなどがいて、当時は人気を博していた。むしろ、グリム兄弟の「子どもと家庭のメルヒェン集」よりも、それらの作家の作品の方が有名だったのである。ところが、現在になってみると、それらはほとんど読まれていない。ドイツではベヒシュタインの作品はある程度読まれているが、ムゼーウス、アルバート・ルートヴィヒ・グリムについては、おとぎ話愛好家には知られているものの、一般にはほとんど知られていない。

ところがグリム兄弟の「子どもと家庭のメルヒェン集」は、ほとんど世界中の国の言葉に翻訳され、読まれている。

読まれているだけではない。19世紀からいろいろな画家がグリムのメルヒェンを絵本にした。リヒターなどが絵本でグリムメルヒェンの世界を視覚に訴え、成功した。その伝統は20世紀になっても引き継がれ、フィッシャーなどが絵本化した。それらの絵本では、グリムメルヒェンのファンタジー世界が、画家の想像力を刺激して、それぞれのメルヒェン世界が繰り広げられている。

ウォルト・ディズニーもグリムメルヒェンを視覚化した。その際、ディズニーは初期の素朴な画面から、次第に絢爛豪華な画面、人物像へと変化させてきた。そして「白雪姫」や「シンデレラ」ではヴェルサイユ宮殿のような場面を作り、ルイ王朝の王女たちのような豪華な衣装の王女を作り上げた。それは、ドイツの田舎のお城や素朴な王女とはまったく別ものになってしまった。それらは日本にも輸入されているので、日本のディズニー読者にとっては、あれがグリムメルヒェンになってしまっている。

ディズニーは、グリムメルヒェンのファンタジー世界を映像化しようとしているのではなく、有名なグリムメルヒェンを使って、映像と絵本で世界的規模の商売をしようとしているのである。敗戦後の日本の出版社と読者は、アメリカから来るものはなんでもありがたく受けとる癖がついてしまっていて、コカコーラと一緒にありがたく、無批判に受け入れてきているのだと思う。

ストーリーも改造されている。「白雪姫」は毒りんごで殺されるだけになっている。最近のディズニー作品では、全く別のストーリーになっている。「ラプンツェル」では、元のストーリーはどんなだったかと思いだせないくらいの変貌をさせられている。「スノーホワイト」も同様にほとんど別の話になっている。これに「スノーホワイト」という題名を付けていいのかと疑いたくなるほどの変容である。

これほど原作と乖離した映画を作るなら、別な題名にするべきではないかと思う。何故わざわざグリムメルヒェンの題名を保持しているのか。これも世界的規模の商売であろう。

映画だけではない。日本では「ほんとうは恐ろしいグリム童話」なる本まで現れ、ベストセラーになった。そこでは、主人公の名前と主たる出来事だけを残して、その他の文と会話はほとんど作り変えられていた。それでも「ほんとうは」という言葉を掲げていた。それはグリム兄弟のメルヒェンとは似ても似つかない、血なまぐさい、エロティックな話の羅列だった。

もし食品についてあれだけ捏造した内容に「ほんとうは」という表示を掲げたら、偽装表示で確実に告訴されるだろう。子どもの文化だから無視されたのである。日本で子どもの文化が軽んじられている実態を示す出来事だった。だが、本題からはずれるのでこれは指摘だけにとどめよう。

グリムのメルヒェンを作り変える仕事は、幼児教育、小学校教育にも及んでいる。「白雪姫」を劇で上演する時、こどもたちは白雪姫になりたがるので、3人の白雪姫が登場する、などは当然のこのように行われている。「狼と七匹の子やぎ」では最後に、おおかみが子どもたちに謝り、みんなで手をつないで仲良く踊る。

私は、「なんでそこまでしてグリムの白雪姫にこだわるのだろう」と思う。主人公の姫が複数必要ならば、そのような芝居を創作すればいいではないか。悪者と子どもが仲良くなる必要があるなら、そのような芝居を創作すればいいではないか。私はここに、児童演劇に関わる人たちの怠慢を感じる。

いや、この怠慢は児童演劇の場合だけではない。ディズニーの一連のグリム映画は、まさに映画製作者たちの怠慢の表現である。似て非なる「ラプンツェル」、似て非なる「スノーホワイト」を作るなら、そこで表現したいファンタジーを創作で表現すべきなのではないか。有名なグリムメルヒェンの主人公の名前をかたっているとしか思えない。創作者としてのプライドなどというものは感じないのだろう。創作者のプライドより、世界規模の商売のほうが重要関心事なのだろう。

200歳になったグリムメルヒェンは、一方では大切に語る人たちがいるが、他方では世界規模の商売の餌食になっているのである。(神奈川県)

特集 グリム童話刊行200年 ②

グリム童話刊行200年と国際シンポジウム報告

竹原 威滋

グリム童話(『子どもと家庭のメルヒェン集』)が1812年のクリスマスに出版されてからちょうど200年に当たる昨年は、ドイツでも日本でも記念の国際シンポジウムが開催された。私も久しぶりにドイツ・ヘッセン地方を訪れ、グリム兄弟ゆかりのメルヒェン街道を歩いてきた。

■カッセル「グリム兄弟博物館」

グリム兄弟はカッセルで民話を集め始め、グリム童話集には最終的に200話の民話が収められているが、生前には誰から聞いたかを読者に明らかにしていない話がある。例えば、「い

ばら姫」は「ヘッセン地方に由来する」と注釈編には書かれているが、自分の持っていたグリム童話初版本には「マリーさんから」と手書きでメモしているのである。ほかにも聞いた日付や改版に備えてテキストに加筆している。これらの書き込みが「聞くメルヒェン」から「読むメルヒェン」へ改定する貴重な資料となっている。グリム兄弟直筆のメモのある初版・2版の兄弟所持本が人類の貴重なドキュメントとしてユネスコ世界記録遺産に登録されており、グリム博物館に展示されている。

同博物館で昨年9月に開催された「グリム・国際シンポジウム」に参加した。ドイツ、日本、中国の研究者による発表・討論を通じ、最近のグリム研究の動向を知ることができ、有意義な集会であった。主なテーマは、グリム童話における数「7」、中国におけるグリム童話の受容、ユーゲント・シュティールとグリム童話の挿絵画家オットー・ウッペローデ、DDR（旧東ドイツ）におけるグリム童話、映画における「白雪姫」、インターネットにおけるグリム童話、グリム兄弟とロマン派、トーマス・マンとグリム兄弟などであった。

中国の研究者、四川大学の楊武能教授によると、中国では最近第7版の完訳が出版されたが、日本のような初校、初版、2版などの翻訳書はまだ出版されていないそうである。

■東洋大学での「グリム童話刊行200年記念国際シンポジウム」

テーマは「グリム童話200年のあゆみ ― 日本とドイツの架け橋として ―」と題して東洋大学創立125周年記念行事として同大学の野野寿子氏の司会・通訳で昨年10月に開催され、研究者、一般の方など約500名が参加した。

先ずチューリヒ大学のツィンマーマン教授がグリム兄弟の故郷であるヘッセンという地が彼らに与えた影響について講演した。「故郷を離れることで、生まれ育った場所の欠点が見えてくると同時に、ふるさとの素晴らしさや代えがたい点に気付くことがある。グリム兄弟の場合、故郷とは単なる空間ではなく、そこに暮らした家族との絆であり、そこで培った学問であり人間関係そのものであった」という。そのような郷土愛が、故郷で語り伝えられてきたお話の収集と保存の原動力になったと指摘した。

続いてカッセル・グリム兄弟博物館館長 ラウアー氏が「文字から図像へ―19～20世紀におけるグリム童話の挿絵の歴史―」をテーマにスライドを用いて講演した。刊行当初は、文字のみであったグリム童話が画家の芸術的想像力を刺激し、自由な発想を呼び起こした。グリム童話に挿絵が加わることで、もともと普遍的価値観をもっていたメルヒェンが、画家の想像力によって中世風の雰囲気をも身にまったり、郷土ヘッセンの風景が挿入されたりと、絵によるイメージの固定化と「郷土化」がおこっていった。このようにしてグリム童話は国境をこえてより広く世界に伝わっていったと結論づけた。

その後、「グリム童話研究がつなぐ過去と未来」をテーマとしたシンポジウムに移り、様々な側面からグリム童話を研究する日本の研究者によって発表が行われた。

関西大学の溝井裕一氏は「メルヒェンの世界観・伝説の世界観 ―変身譚を中心に―」と題し、「変身」という事象をテーマにグリム童話と世界各地に伝わる伝説の共通点・相違点を読み解いた。

武庫川女子大学の野口芳子氏は「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」をテーマに、明

治期に日本へ紹介されたグリム童話が、最初はドイツ語から訳されたのではなく、英語訳からの重訳であったので、そこには当時のビクトリア王朝時代の英国の思想や文化、道徳が反映されていると指摘した。

最後に竹原は「グリム童話と比較民話学」と題してグリム童話と日本を含めた世界各国の民話を比較し、それらの国境や時代を超越した共通点に言及した。グリム童話の誕生により、ヨーロッパ各地で伝承文学の収集が盛んになり、その結果、いろいろな地域で似たような話が伝承していることがわかった。それを分類し分析したことが、比較民話学の始まりであった。国際的にはアールネ／トンブソン／ウターによる『昔話の話型目録』が作成され、日本でも柳田國男がジュネーブ滞在中に集めたグリム童話に関する文献を持ち帰って以来、その影響もあって、『名彙』が作成された。その後、関敬吾の『集成』、稲田浩二／小澤俊夫氏の『通観』によって日本の昔話の分類法が確立していったわけである。さらにブレードニヒ氏や三原幸久氏*の地理歴史的研究や最近の日本民話の会 外国民話研究会の「野営の動物たち (ATU130)」に関する共同研究などの成果を例示しておきたい。

(* 三原氏は今年1月18日に逝去されました。ご冥福を祈ります。) (奈良県)



ユネスコ世界記録遺産：グリム童話の初版・2版
カッセル・グリム兄弟博物館所蔵

特集 グリム童話刊行200年 ③

フンパーディンク作曲『ヘンゼルとグレーテル』

加藤 耕義

昨年十二月、趣味で参加しているオーケストラで、エンゲルベルト・フンパーディンク作曲のオペラ『ヘンゼルとグレーテル』(1893)の序曲を演奏する機会に恵まれた。

このオペラは、もともとフンパーディンクの妹アーデルハイト・ヴェツテが夫の誕生日に家族で楽しむためにグリム童話を脚色し、作曲家の兄に歌を書くよう頼んだのが始まりである。

これが家族の好評を博したので、ヴェッテの台本とフンパーディンクの作曲により三幕のオペラに仕上げられた。

このオペラはドイツでは現在でも大変人気があり、毎年クリスマスから年末にかけて、子どもと家族向けに上演される。『メルヒェン百科事典』によれば、メルヒェンを題材としたオペラでもっとも成功した作品である。

フンパーディンクの『ヘンゼルとグレーテル』をグリム童話と比較すると、子どもたちと家族を楽しませるために、いろいろな工夫がなされていることがわかる。

大きな変更のひとつが、導入部である。グリム童話と違って、フンパーディンクのオペラには飢えの深刻さはない。たしかに子どもたちはお腹をすかせて母親の帰りを待っている。しかしグレーテルはヘンゼルに「ポットの中を覗いてみて。きょう隣のおばさんがミルクをくれたのよ。お母さんが帰ってきたら、きっとおいしいミルクがゆを作ってくれるわ」と言い、二人で「おかゆだ、おかゆだ」と踊り出す。そこに母親が帰ってきて、子どもたちが仕事もせずに踊っていたのを見て怒り、子どもたちを叩こうと棒を持って追いかけて、ポットを落としてしまう。母親が「ああ、夕食はどうしよう」と泣くと、ヘンゼルはクスクス笑う。そして母親は夕食代わりに、子どもたちに森へいちごを摘みに行かせる。箒作りの父親は、森には恐ろしい魔女がいることを知っていて、子どもたちが森に入ったと聞くと、妻といっしょに子どもたちを捜しに行く。つまり、グリム童話の子を捨てる母親（四版から継母）と父親が、子どもたちを救いに行く父親と母親に変えられている。

結末部も大きく異なっている。悪が徹底的に罰せられるメルヒェンとは違い、フンパーディンクのオペラでは、魔女はかまどに入れられて最期を迎えるものの、焼かれてクッキーになる。それに続いて、ヘンゼルとグレーテルがハシバミの枝で、クッキーにされていた多くの子どもたちの魔法を解く。つまり、かまどで焼かれてクッキーになることは、完全な死ではなくなっている。最後はオペラにふさわしく、多くの子どもたちが救われ、ヘンゼルとグレーテルは両親と再会し、皆で歌う華やかな場面で幕となる。

さて、このオペラがグリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」かと問うなら、答えは、否であり、もはや明らかにフンパーディンクの「ヘンゼルとグレーテル」である。それでは、これが良い作品かと問うなら、私は二つの理由から良い作品だと思う。一つは、聴衆である子どもたちへの愛情である。ヴェッテが最初に「ヘンゼルとグレーテル」を演じることを考えたのは家族のためであり、そこには目の前にいる子どもたちへの愛情があふれている。この家庭劇がオペラに発展したときにもその姿勢は守られている。つまり、受け手である子どもたちへの愛情のこもったオペラといえよう。二つめは、グリム童話への愛情である。たとえば「カリカリ、ポリポリ、私のおうちをかじるのは誰」「風だよ、風だよ、風の子だ」などの韻文はそのまま残されている。また先ほど挙げたハシバミの枝でクッキーにされていた子どもたちを救う場面はグリム童話六九番「ヨリンデとヨリンゲル」を思い出させる。また、解釈の域に踏み込むかもしれないが、オペラには現れないが、グリム童話には登場するカモの鳴き声なども音として含まれているように思う。演奏してみると、この作品がグリム童話に精通し、それを楽しみ、グリム童話に寄り添いながら創作されたことが感じられる。

もしグリム兄弟がこのオペラを見たらどう感じたであろうか。グリム兄弟は初版の序において、自分たちはメルヒェンを書き変えたりしなかったと述べ、二版の序でも自分たちのメルヒェン収集の忠実さを強調している。そして慣れた手がメルヒェンを書き変えることを強く批判している。

しかし、その批判のあと次のように付け加えている「しかし、この批判はメルヒェンを美化して、より詩的に仕立て上げようとする書き換えについて言ったのであり、メルヒェンを、時代にあった独自の文芸にしようとする自由なとらえ方に対して言ったものではありません」。フンパーディンクのオペラはこの「自由なとらえ方」による作品ではないだろうか。グリム兄弟は、メルヒェンがその美しさと魅力ゆえに、様々に翻案されていくことを予想していたのであろう。そして序の最後に「私たちはこの本を善意の手にゆだねます。その手にある祝福の力を信じながら」と書いている。グリム童話誕生二〇〇年を迎えた今、人々が語り伝えてきたメルヒェンへの愛情と、目の前の子どもたちへの愛情が、グリム童話に触れるときに大切なのだと、フンパーディンクの作品に触れて思った。 (東京都)

特集 グリム童話刊行200年 ④

グリム200年

久保 華誉

現在、日本で初めてグリム童話が翻訳されたのは明治6(1873)年のこととされている。初版の第一巻が出版されて61年後のことである。ドイツに倣い、教育学者の湯本武比古が修身を説く教材、修身童話としてグリム童話の「藁と炭と豆」を紹介したのが明治33年。日本で単にグリム童話の翻訳が出版されるのみならず、学校教育や口演童話などを通じて広まってから100年以上はたったと言えるだろう。

日本人のグリム童話好きは現在も変わらず、各地にグリムを冠した施設がある。栃木県下野市もその一つで、グリムの森「グリムの館」がある。旧石橋町がグリム兄弟と縁の深いヘッセン州の町と姉妹都市を結んでいたため、「グリム兄弟が童話を通して世界中の人々に夢やメルヘンを与えたように、夢とロマンが感じられるまちづくりを目指し、地域づくり事業として『世界に誇るグリムの里づくり』をテーマにして、まちづくりをすすめて」おり、その拠点となっている。ここでは、様々なグリムに因んだ催しを行っており、昨年は15回を迎えたおはなしフェストが6月3日に開かれた。

朝から地元のジュニアオーケストラによる演奏や下野市内の4つの団体によるグリム童話の紙芝居や影絵、パネルシアター、語りなどが行われた。敷地内には屋台や地元の手打ちそばのテントなども並び、下は乳幼児から親子連れなどで大変賑わっている。午後からは、グリム童話の初版発行200年を記念し「グリム童話200年の秘密」と題した講演会があり、西村佑子氏、橋本孝氏、天沼春樹氏とともにパネリストの一人として参加させていただいた。

西村裕子氏は「3人の糸繰り女」の主人公である娘が、醜い親戚でも結婚式に招く実直さか

ら幸せをつかむことから、怠け者で愚かだけれどもたくましい女性であると指摘する。「灰かぶり」も、父親に土産を頼む際に見姉たちと比べて慎ましい父親の帽子にあたる枝をお願いしている。しかし、父親の持って帰ったハシバミの枝は「財産要求」を示唆しており、信心深く慎み深い女性として描きながらもしたたかに生きる両面を兼ね備えている。このようなグリム童話の女性たちを上げながら、魔女も同様に悪と善の両面を持っており、教会の壁画に北欧神話の女神を魔女として描いていることなど紹介された。

橋本孝氏はグリム兄弟に会った日本人の話で、新発見の報告もあった。1862年に文久使節団のメンバーである日本人3人が77歳になっていた兄ヤーコプの元に訪れている。その際、今まで手紙に書かれているのみで行方不明とされていた、兄ヤーコプに日本人が贈った小箱と考えられる漆の文箱が見つかったそうだ。使節団のメンバーには福沢諭吉などもいるが、誰がグリム兄弟に会ったのかははっきりしていない。また高名な学者であるグリムを訪ねたというよりも、ハインリッヒ・グリムという軍医を訪ねる予定であったのに、間違った可能性があるというのも興味深かった。

私は、グリム童話が修身教育や口演童話を通して、日本の昔話にどのように受容され変容するのかを「豆と藁と炭」「ブレーメンの音楽隊」を例に挙げながら紹介した。聞いてくださった新潟県出身の方が、やはり自分も「豆と藁と炭」の話聞いたことがあるとのことだった。この話は水沢謙一氏が精力的に集めたためか新潟に多いのだが、なぜ新潟に多いのか気になっている。

天沼春樹氏は、グリム兄弟がどのようにドイツ人に尊敬される存在であるのかを話しつつ、ディスカッションの司会をなさり、まとめて下さった。ユーロに統合される前に、ドイツには日常生活にはあまり使わないような最高額の1,000マルク紙幣があり、その肖像にグリム兄弟が使われている。世界に名だたる文豪であり政治家でもあったゲーテを差し置き、グリム兄弟が選ばれたのはドイツ国民会議で「ドイツを統一せねばならない」と述べたことが大きいとのことであった。また清貧の中で兄弟愛に満ち研究を続けた姿も尊敬を集めるのだろう。

講演会に来てくださった方々は午前とはうって変わって年配の方が増え、会場の方の話によると熱心な常連の方も多とのことだった。この「グリムの館」の賑わいを見ていると、グリム童話の不思議な魅力は200年たっても異国の地に渡っても、まだまだ色褪せないことがよく分かる。
(東京都)



グリムの森「グリムの館」ドイツにいるかと錯覚するような風景（栃木県下野市）

「おはなし会」で語られるグリムの昔話

杉浦 邦子

グリムの昔話は、子どもを惹きつける力を持っています。子どもたちに語っていると、子どもの体がきゅっと堅くなり、真剣な目をして聞き入っているのがわかります。そして、昔話の世界へ吸い込まれていくのを感じることができます。語る側も嬉しくなる瞬間です。このような経験をした語り手は何人もあると思います。語り手の力量には関係なく、グリムの昔話そのものが聞かせる力を持っているので、素直にストーリーを追っていけばよいのです。あるベテランの語り手は、上手に語ろうとしない方がよいと言うほどです。

語り手にとっても魅力的なグリムの昔話について勉強熱心な人は多く、中には、グリム兄弟ゆかりの土地を訪ねてドイツまで研修に出かける語り手も少なくありません。けれども、私は「ホレのおばさん (KHM24)」「一つ目、二つ目、三つ目 (KHM130)」は好きで語ったこともあります。多くを語れるほどの情熱も知識もありません。そこで、語りの現場である「おはなし会」で、グリムの昔話がどのように語られているかを見てみたいと思います。

今、日本の子どもたちが昔話を聞く場としては、図書館や保育園・幼稚園や学校などで行われる「おはなし会」が一般的です。語り手が語る日本や外国の昔話、時には創作の「おはなし」を友達と一緒に聞いて楽しみます。語り手は、二、三人または一人の場合もありますが、多くは女性です。ほとんどの語り手は本を読んで覚えて語りますので、グリムなら数多い翻訳書の中から一冊を選びます。何冊も読み比べたり参考にする人もいます。

40年以上前に始まった「おはなし会」活動の当初は、学校で行われることはほとんどありませんでしたが、語り手たちは、より多くの子どもたちが昔話と出会うためには、学校での「おはなし会」を望んでいました。実現には時間を要しましたが、語り手の熱意と状況の変化があり徐々に増え、地域差はあるでしょうが、広まってきています。

「おはなし会」のプログラムは、幼い子ども対象なら20分位、小学生なら40分位を目処に、日本や外国の昔話を中心に、わらべ唄や絵本を加える場合が多いようです。もちろん、耳から語り（ストーリーテリング）だけを聞くプログラムもあります。外国の昔話に注目しますと、90年代半ば頃までは、イギリスの昔話が多かったような気がしますが、最近は、グリムの昔話が目立つように思います。友人の語り手たちも同じような印象を持っていましたので、手元にある種々の「おはなし会」のプログラムや資料で確かめてみました。すると、確かに上の傾向が裏付けられます。

たとえば、「ねりまおはなしの会」（1979年発足、現会員約70名、東京都練馬区内）発行の『おはなし おはなし おはなし』その一（1982年）から『同』その五（2009年）は、日本の昔話・外国の昔話・創作という三分野でそれぞれ会員の語る話名と出典及び語り手のひとこと感想を掲載しています。昔話の項を見ますと、90年代末頃からグリムの昔話が目立ってきます。人気の話を挙げてみますと、「おいしいおかゆ (KHM103)」「狼と七ひきの子やぎ (KH

M5)「ホレのおばさん (KHM24)」「赤ずきん (KHM26)」「七羽のからす (KHM25)」「野ばら姫 (KHM50)」「こびととくつや (KHM39)」「星の銀貨 (KHM153)」「ルンペルシュティルツヒェン (KHM55)」「ラプンツェル (KHM12)」「三枚の鳥のはね (KHM63)」等々です。これらは、何人もが何度も語っているのです。そして、他のおはなしグループも同様な傾向にあるといつてよいでしょう。

グリムの昔話が頻繁に語られるようになったのは、小学校で「おはなし会」が活発になる時期と重なると、経験豊富な語り手から教えられました。納得できる指摘だと思います。彼女は、グリムの昔話をプログラムに入れると〈しまる〉と言います。聞き上手な子どもだけでなく、聞き慣れていない子どもにも、しっかり届く力を持っているから、と。また、問題を抱える年代の中学生も「がちょう番のおんな (KHM89)」や「熊の皮をきた男 (KHM101)」等は、とてもよく聞いてくれるそうです。

グリムの昔話が語られる意味は、子どもの心の深いところに響き、昔話世界を語り手と聞き手が共感できるところにもあるのでしょう。

(日本語の話名はKHM39・55 以外は『グリム童話集』(岩波文庫) 金田鬼一訳による)

(愛知県)

《各地からの報告》 ①

昔話・伝説・言い伝えなどによる地域活性化事業

常光 徹

秋田県では、これまでに報告された県内の口承文芸に関する資料を収集整理し保管するとともに、地域の活性化につなげるための事業を推進する目的で平成 22 年に「昔話・伝説・言い伝えなどによる地域活性化事業委員会」を立ち上げた。文化庁の「地域伝統文化総合活性化事業」の一環で、外部の委員は、常光徹、嶋田忠一、齋藤壽胤、日高水穂、小堀光夫、高村竜平、林良雄、石井正己の 6 名である。

事業の一つは、収集した資料をもとにデータベースを構築し広く公開することである。県内各地で伝承されてきた昔話や伝説約 1 万話について、一話ごとに、話型名、あらすじ、出典、所蔵先などを入力し、それらの情報を「地図から探す」「分類から探す」「画像から探す」といった項目を設けて検索できるようにするもので、秋田大学の林先生を中心に学生の協力を得て作業を進めている。方々に分散していた資料を集約しデータベース化することで、完成すればだれもが容易に利用することが可能となり、地域の活性化や学校での教材利用など昔話や伝説の新しい活用が期待される。

データベースの構築とあわせて推進してきたのが、シンポジウムや語りの会の開催、伝説ツアーの実施などである。平成 23 年度は、講演会・シンポジウム「むがしっこで秋田を元気に」(秋田市文化会館)、昔がたりの会第 1 回「秋の夜長のこわい話」(関善賑わい屋敷)、第 2 回「おなかいっぱい！昔話」(遊学館)、第 3 回「雪の日に心あたたまる話」(横手市の民家の蔵)を行なった。最終年である 24 年度は、講演会・シンポジウム「昔っこサミット」(秋田市にぎわい

交流館)、昔がたりの会第1回「花の季節 昔がたりを曲屋で」(秋田県立農業科学館曲屋)、第2回は秋田空港での開催を予定している。いずれの会場でも、語り手たちの熱のこもった昔語りに耳を傾け、シンポジウムでは現在の昔語伝承が抱えるさまざまな課題について、語り手や一般の参加者とのあいだで熱い議論が交わされた。

また、昔話や伝説の地を巡る「男鹿半島ツアー」(平成24年11月4日)と「田沢湖伝説ツアー」(平成24年11月11日)を実施した。バスを利用して伝承地を訪ねるという新たな試みだったが、参加者の評価はおおむね好評で、データベースが完成すればさらに魅力的な企画が生まれるのではないかと思う。(千葉県)

《各地からの報告》 ②

市川民話の会『改訂新版 市川のむかし話』の刊行

根岸 英之

市川民話の会は、1978年に発足し、市川の民話を記録し、次代に継承することを目的に活動してきた。

地元の方から伺った話はテープに録音し、記録性の高い資料集として、『市川の伝承民話』1～8集としてまとめてきた(7集までは市川市教育委員会発行。8集は市川民話の会発行)。また、採話した民話をもとに、子どもにも分かりやすい読み物風にまとめた『市川のむかし話』(1980年)、『続市川のむかし話』(1990年)も刊行してきた。

『市川のむかし話』は、市川の代表的な話を収めた本であったが、長らく絶版となっており、再版を望む声が寄せられていた。会では、その要請を受け、初版そのままではなく、文章に手を加え、改訂した上で刊行する方針を取った。そして、2012年11月、自費出版の形で刊行された。A5版230ページ、イラストもたくさん入った読みやすい本となった。

初版が刊行された1980年代頃の、民話再話本の全国的な傾向としては、読み物的なものが多く出版された時代といえる。しかし、2000年以降は、「語り」の特徴を踏まえた出版が多くなってきているといえる。これは、民話は本来、文字として読まれるものではなく、語り手と聴き手の間で語られるものであるとの認識が一般的になってきたこと、また昨今は、学校教育の中でも民話の語りに取り組む学習が増えていること、などによるものといえるだろう。

改訂新版では、初版では、「です・ます」とされていた話の中でも、いわゆる「昔話」や「世間話」の一部を、「だったとよ」や「だったって」などと、市川での語りに近い形にして収めてみた。一方、「伝説」的な話は、初版同様、「です・ます」体で所収した。初版では、読み物的な文飾も多く見られたが、それらの表現についても、できるだけそぎ落とすような方向で編集を進めた。

もっとも、編集担当の会員間でも、そのバランスには、考えの相違があり、十分に調整できたとはいえない部分もあるが、同一の話を、30年後に再話し直した刊行物は、口承文芸研究の上からも、興味を持っていただけるものと思う。多くの方にお読みいただきたい。(千葉県)

事務局便り

○事務局からのお願い

学会では、東日本大震災で被災された会員の情報を集めております。被災された会員におかれましては、事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

○会員の異動（敬称略）

《新入会》道前美佐緒（愛知）・塩瀬博子（愛知）・深澤美香（千葉）

《退会》小林輝治（石川）（トルコ）

《物故》小林成光（北海道）

○寄贈書籍

・『国立歴史民俗博物館研究報告』第 集 年 月

・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第 巻 号 年 ～ 月・ 年 月

・三浦佑之著『古代研究 列島の神話・文化・言語』青土社 年 月

・末次智著『琉球宮廷歌謡論 首里城の時空から』森話社 年 月

・下野敏見著『鹿児島ふるさとの昔話』南方新社 年 月

・岩本通弥・菅豊・中村淳編著『民俗学の可能性を拓く 「野の学問」とアカデミズム』青弓社 年 月

・西脇隆夫編『シッディ・クール モンゴル説話集』名古屋学院大学総合研究所研究叢書 溪水社 年 月

○会報データベース化についてのお願い

学会では会報のバックナンバーをデータベース化して会員及び一般に公開して利用の便宜をはかりたいと考えております（個人情報を除きます）。データベース化は順次古い号から進めて参りますが、現会員で会報に執筆された方でデータベース化にどうしても不同意な方は、お申し出いただきたく存じます。通信等での個別の許諾はとりませんので、事務局宛にご連絡をお願いいたします。

* 今後、会報第52号以降の執筆者については、データベース化に同意して執筆されたものとして許諾はとりません。

○国際口承文芸学会（ 略称 ）第 回大会の専用公式サイトができています。大会は 年 月 日～ 日、リトアニアのヴィリニュス（主催はリトアニア文学民俗学研究所とヴィリニュス大学）で開催され、大会総合テーマは「現代世界における口承文芸—その単一性と多様性（ ）」です。大会参加と研究発表は非会員でも可、参加申込みはまだ可能です。詳細は以下のサイトをご覧ください。 [_____](#)

○日本口承文芸学会事務局

〒 東京都調布市緑ヶ丘 - 白百合女子大学 間宮史子研究室
（ ） （児童文化研究センター）

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP（ ）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。

入会金 円、年会費 円です。郵便振替口座 をご利用下さい。